Title	シンポジウムを終えて：付記
Author(s)	阿久戸，光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.57 別冊,2014.3：78-79
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5101
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

シンポジウムを終えて――付記

聖学院理事長・院長・聖学院大学学長　阿久戸　光晴

ドイツの元大統領のヴァイツゼッカーは一九八五年八月のドイツ連邦議会演説で、「過去を直視しなければ本当の和解はない」ということを言われた。現実主義的な政治家は、過去を棚上げして未来志向で行くということをよく語るが、二一世紀の平和の構築にとって、過去の直視、過去との和解という課題を、クリスチャン・リアリズムはどのように語るのかということを伺いたく思い、質疑応答の時間にラヴィン教授にお尋ねした。

千葉先生のスキームによれば、「上からのクリスチャン・リアリズム」と「下からのクリスチャン・リアリズム」がある。一方、ラヴィン教授の方向は「前に向かう（forward）クリスチャン・リアリズム」であろう。わたしが質問したのは、それに対して、もう一つの方向、「過去を直視していくクリスチャン・リアリズム」すなわち「過去との和解を目指すクリスチャン・リアリズム」があるのではないか、と考えたからである。そしてそれなくして、本当の平和の構築は成り立たないと思われる。

ラヴィン先生のお応えは以下のようなものであった。

他のレスポンダントの先生方がこれについてどういう風に考えられるか、伺いたいと思います。と言いま

すのは、今、ご質問くださった内容は、クリスチャン・リアリズムにとって新しい種類の質問であるからです。過去の出来事はそれが過去になるまで語られないように感じることがあります。過去の出来事をうまく終わらせて、はじめてそれを振り返ることができるというように感じるのです。

和解について考えるとき、過去の出来事を経て、正義はどれだけ実際に行われてくるようになったか、それは首尾よくなされるようになったかどうか、ということが重要になってきます。ニーバーが神の審判を常に憶えるべきであると言ったその言葉を、私たちは今こそ憶えるべきでしょう。神の審判とは歴史を超越したものであります。純粋に善いものも歴史にはないし、おそらく、純粋な悪も歴史の中にはなかったことを想い起こす必要があるでしょう。

わたしたちはそのような過去に対して責任ある態度を保持しなければならないというニーバーの言葉を憶えたいと思います。例えば、南アフリカのように、かつて自分たちを虐げてきた人たちと共に生きていかなければならない、というような状況においては特にそうでありましょう。

非常に示唆に富んだお答えであると思われたので、ここに付記として記させていただくことにした。